

用語解説

【円形周溝】 えんけいしゅうこう

円形に溝を巡らせた遺構で、青森県内では7～12世紀に見られる。中央に土坑をもった墳墓と形態が類似することから、墓の可能性が考えられている。

【河岸段丘】 かがんだんきゅう

河川の中・下流域に流路に沿って形成される階段状の地形（河成段丘）。

【カマド状遺構】 かまどじょういこう

長楕円形の浅い掘り込みをもち、壁面の一方に焼け面を伴う遺構。中世の遺跡で検出されることが多く、屋外のカマドと考えられている。

【環状列石】 かんじょうれっせき

ストーンサークルとも呼ばれる。石を配置して構築した配石遺構の一種。墓、あるいは祭祀に関わる施設と考えられる場合が多い。配石遺構にはほかに組石遺構などが見られる。東北地方北部で、大型の環状列石は後期前葉に盛行する。環状列石には、秋田県鹿角市大湯環状列石のように土坑の上に石を配した配石墓が全体として環状にめぐるものや、青森市小牧野遺跡のように円形の広場を囲むように列石が環状に配置されたものがある。

【管玉】 くだたま

円筒形を呈し、中央に孔を有する装飾に用いられた玉。

【組石遺構】 くみいしいこう

→【環状列石】参照。

【後北式土器】 こうほくしきどき

→【続縄文時代】参照。

【再葬土器棺墓】 さいそうどきかんぼ

一次的な埋葬によって白骨化した遺体を土器に収めて再度埋葬した墓。東北北部で縄文時代中期末葉から後期前葉にかけて流行した。

【逆茂木】 さかもぎ

落とし穴に追い込んだ獲物が動けなくなるように、底面に立てた木の杭。

【擦文土器】 さつもんどき

擦文時代は7～13世紀頃にかけて北海道で栄えた文化で、本州の土師器の影響を受けた擦文土器が使用される。器面に擦痕や沈線で施された文様がみられる。

【製塩土器】 せいえんどき

海水を土器に入れ、煮詰めて塩を得るための土器。縄文時代晩期のものは薄手で、外面には粘土の輪積痕が残っているものが多い。青森県では縄文時代晩期と平安時代に多く見られる。

【支脚】 しきゃく

カマド等で煮炊きをする際、器の安定と火のまわりを良くするために焚き面に設置する土製品または転用品の総称。ガスコンロや七輪でいう五徳の役割。

【地床炉】 じしょうろ

→【炉】参照。

【焼土遺構】 しょうどいこう

土が赤く焼けた、火を焚いたと考えられる痕跡の総称。

【須恵器】 すえき

青く硬く焼き締まった土器で、古墳

時代の中頃（5世紀前半）に朝鮮半島から伝わった焼成技術をもって焼いた焼き物のこと。青森県では、日本最北の須恵器窯跡である五所川原窯跡群がある。9世紀後半に生産が開始され、その後、持子沢地区から前田野目地区で盛んに生産された。青森県内のほか、北海道西半域や秋田県北域、岩手県北域を中心に供給された。

【珠洲焼】すずやき

平安時代末期から室町時代にかけて、能登半島先端の珠洲周辺で生産された陶器。主に壺・甕・播鉢が生産され、その製品は北陸から北海道にいたる日本海沿岸地域に流通した。

【捨て場・捨て場遺構】すてば・すてばいこう

一定のまとまった範囲に遺物が人為的に廃棄・集積された場所。

【青磁】せいじ

素地と釉薬の中に含まれる鉄分が青く発色した磁器。日本では中国の龍泉窯（りゅうせんよう）やその周辺で製作されたものが多く出土している。

【石鏃】せきぞく

石製の矢じり。矢の先に取りつけて、物に突き刺さるようにした部分。

【続縄文時代】ぞくじょうもんじだい

北海道を中心に縄文時代に後続する時代で、本州の弥生時代から古墳時代中頃に相当する。後半期には後北式土器が広く展開し、東北地方にまで分布するようになる。

【敲石】たたきいし

原石を割ったり、剥片を剥離したり、堅果をくだいたりするハンマー。

【竪穴建物（跡）】たてあな たてもの（あと）

地面を掘り下げて床とし、その上に屋根をふいた建物。本県では縄文時代から平安時代までの一般的な家屋である。煮炊きの施設として炉が伴い、古墳時代以降は炉に代わりカマドが壁際につくられるようになる。

【土器埋設遺構】どきまいせついうこう

深鉢や円筒形の土器をほぼ原形を保ったまま埋設した遺構。炉や入り口などの屋内や、屋外にもつくられる。人骨など埋葬が明らかな例では甕棺（かめかん）と呼ばれることがある。

【土偶】どぐう

土で作られた人形。縄文時代の重要な信仰的遺物で、草創期から晩期にわたってつくられた。用途については、護符、豊穰祈願、安産祈願など諸説がある。

【土坑・土坑墓】どこう・どこうぼ

土坑は地面に掘られた穴の総称。貯蔵施設と考えられるフラスコ状土坑（断面の形がフラスコに似ている）や、落とし穴と考えられる溝状土坑（Tピット）とよばれるものなどがあり、墓として用いられたものは土坑墓（土坑墓）とよばれる。柱穴などの小さな穴をピットと呼んで区別することもある。

【十和田 a 火山灰（To-a）】とわだ a かざんばい

西暦915年頃に十和田カルデラ（現在の十和田湖周辺）が噴火した際に降下した火山灰。灰白色を呈し、南は宮城県や山形県などでも確認されている。

【白頭山－苫小牧火山灰 (B-Tm)】はくとうさんとまこまいかざんばい

西暦 947 年頃に降り積もった朝鮮半島北部の白頭山の噴火に由来する火山灰。火山灰は短期間で広範囲に降下するため、複数の遺跡・遺構の年代を知る重要な指標となる。

【土師器】 はじき

弥生土器の流れを汲み、古墳時代～奈良・平安時代まで生産され、中世・近世のかわらけに取って代わられるまで生産された素焼きの土器を指す。

【放射性炭素年代測定】 ほうしゃせいたんそねんだいそくてい

生物中に含まれる炭素 14 が、死滅後 5730 年で半分の量になる性質を利用した年代測定。試料中の放射線量を測定することで年代を割り出すことができる。

【掘立柱建物 (跡)】 ほったてばしらたてもの (あと)

地面に穴を掘って柱を立てた、平地式や高床式の建物。

【溝状土坑】 みぞじょうどころ

→ 【土坑・土坑墓】 参照。

【炉】 ろ

調理や暖を取るために繰り返し火を焚いた場所。地面で直接火を焚いた地床炉、周囲を石で囲った石囲炉、土器を埋め込んだ土器埋設炉 (どきまいせつろ)、土器片を敷き詰めた土器片敷炉 (どきへんじきろ) など、時期・地域によって様々な種類がある。縄文時代中期末葉には土器埋設炉と石囲炉が組み合わされた複式炉 (ふくしきろ) とよばれるものもある。住居の中に作られたものを屋内炉、外に作られたも

のを屋外炉と呼ぶこともある。

【蕨手刀】 わらびてとう

奈良時代から平安時代初頭にかけて製作された鉄製の刀。柄頭が春季の早蕨の芽を巻いた形に似ていることからよばれる。東日本に多く、特に北海道・東北に集中している。

■ 引用・参考文献 ■

- 青森県 2001 『青森県史 自然編 地学』
青森県 2017 『青森県史 資料編 考古 1』
青森県 2013 『青森県史 資料編 考古 2』
青森県 2005 『青森県史 資料編 考古 3』
阿部猛ほか編 1995 『日本古代史研究事典』 東京堂出版
江坂輝禰ほか編 1983 『日本考古学小辞典』 ニューサイエンス社
大川清ほか編 1996 『日本土器事典』 雄山閣
小野正敏ほか編 2007 『歴史考古学大辞典』 吉川弘文館
加藤晋平・鶴丸俊明 1980 『図録石器の基礎知識 I - 先土器 (上) -』 柏書房
小林達雄監修 2008 『総覧縄文土器』 アム・プロモーション
田中琢・佐原真ほか編 2002 『日本考古学事典』 三省堂
戸沢充則編 1994 『縄文時代研究事典』 東京堂出版
ブリタニカ国際大百科事典
デジタル大辞泉
文化庁文化財記念物課監修 奈良文化財研究所編 2010 『発掘調査のてびき - 整理・報告書編 -』